

## 旅人の望郷歌

旅人の歌は、神亀元年三月頃の作と推定されている。芳野行幸、従駕の長歌反歌を除いては、すべて、神亀五年と考えられている。旅人の大宰府赴任以後、天平二年、大納言となり、上京してから、旅人の薨去までの略々四ヶ年間の歌とみられるもののみである。

このような短期間の中の、約六十首の歌のみを資料として、歌人旅人の全体を論ずることは、まことに困難なことであると共に、尽し得たものとはなり得ないことである。

これについて、武田祐吉先生は、旅人の歌としては、集中におお無署名のまま、旅人の作歌前期の歌があるのではないかと、という推考を示されている。「万葉集講座」巻一、「大伴旅人」―春陽堂刊）このことは、その推考をなお推しすすめ得る要素が、集中に存在しており、更に分析を加えることによつてかなり可能性を生み出し得るものがある。しかし、武田祐吉先生は、これはまだ「臆説であることをごわつておく。」と記されており、最近においてもまた、同様の御意見を直接拝聴していることでもあつて、筆者自身もお検討研

究中のことである故に、今は、まだこれを更に論表することは出来ない。

やはり、今日においては、現資料の範囲内にて論ずるの外はない。

この場合、旅人の歌は、大きく三種に分類され得る。武田祐吉先生の分類に従つて記せば「他人に贈与する為に、読者を予定して、表面を繕つて調子よく作つてゐるものと、特に創作意識が働いて特殊の構造を有し特殊の内容を歌ふものと、独自の境涯に在つて自由に歌ふもの」との三つである。

今、ここに論題として採りあげようとするのは、この中の第三番目の群に入るもの、換言すれば、自己の感情を最も率直に歌つている群の歌類である。

この第三番目の歌類は、更になお、三種に分けられる、即ち、それは、望郷の歌、讀酒歌、亡妻追憶の歌の三つである。

これらの歌の発生は、旅人が大宰帥として、九州の地に行つて間もなく、妻大伴の郎女の死に逢い、更に、長屋君自尽の事件を聞いたというようなことが、九州という遠隔の地に

老年六十四才を以つて移つて来た旅人の旅愁の上に加わり、その旅愁と、死別の悲哀、世間苦を基底的要因として、ここ四ヶ年間の旅人の詠嘆が、ともかくも大きく姿を表わしたものといい得よう。これについて、亡妻追憶にかかわる歌（以下これを簡略に亡妻歌と記すこととする。）は、その性格を最もはつきりと表示している歌類である。しかるに、旅人のこの亡妻歌においても、旅人は、妻の死に対する悲しみそのものよりも、残された者としての自己に対する自分の悲しみ苦しみというものを歌い表わしているのみであり、旅人の歌は、たいへん自己中心的であるというふうを受けとられ、評されて来ている。しかし、ともかくも本質と、亡妻への追憶に連るものであることはいふまでもないことである。

讚酒歌においても、それらの作の時が亡妻以後のものであり、作の場が九州大宰府の地であることによつても、これらの歌が、その旅愁と亡妻への追憶の心情を基底とし、そこに、彼の漢文学の教養がプラスされて表われて来た、一つの特異な表現の歌類であるということが出来る。

かくみることにより、亡妻歌と讚酒歌とは、その基底において、亡妻への追憶の悲しみという線における連りを持つており、もう少し大きく範圍を拡げれば、讚酒歌の類も、亡妻歌という分類の中の歌類ともいい得るものである。

しかるに、望郷歌は、そこに亡妻に対する追憶の悲しみというものが歌の表面に表われて来ていないばかりでなく、同

時に、その発想の基底においても、その情意が主体的にかかわりのない歌類と見られ、単なる望郷の歌として受けとられている。まことに、六十四才の老年の身を、遠隔の地九州に置く旅人にとつて、それが決して左遷ではないとして今日考証されているような境遇であつたとしても、人間旅人の心の中に人生終末の悲哀をいだかじめないではおかないであろう。そのみによつてそこに、幼時、少年時、青年時の郷土に対する追憶の歌が生まれ出て来ることはまたきわめて当然のことであろう。

今、筆者が問題にしたいと思うことは、旅人の望郷歌が、かかる意味においての単なる望郷の歌であり、亡妻に対する追憶の悲しみは、望郷歌発想の主体的要素としては、直接的な情意表現にはかわりのないものであるとされている点にある。

○

旅人の望郷歌としては「帥大伴の卿の歌五首」及び卷八所収の「大宰の帥大伴卿の雪を見て京を憶ふ」（一六三九）の一首である。

これらの望郷歌はいずれも、その作年月が明記されていないが、旅人の九州移居の後の作であることは、その詞書及び歌の内容によつて略明かなことである。ただ妻大伴の郎女の死との前後については必ずしも資料的に明確であるとはなし得ない。旅人の九州移居を神龜五年とすれば、妻大伴の郎女

の死は、その年の夏であり、このことは立証され得ていることであるので（8、一四七二左注参照）、望郷歌の作時も、その以後であるとして安易に承認されている。

しかし、旅人の大宰府下りの年月については、なお今日、異論があり、確定をしていないことであるし、詞書に「帥」とあることも、後から補正せられる場合もあり、必ずしも決定的資料となし得ない弱点がある。

今、この問題をも含めて、「帥大伴の卿の歌五首」と詞書のある五首の望郷歌の性格をもう一步進め深めて探求しようとするのである。

なお、この問題究明に入る前に、旅人歌に見られる特色、特に、この五首の解明に連りを持つ特色について触れながら論を進めて行くこととする。

その特色の一つとして、既に武田祐吉先生が述べられていることであるが、「旅人の作品と目せられるものの中には、一首一首独立してゐないで、数首の歌と、及びこれを点綴する漢文とから成り全体として一の構成を有してゐるものがある。」この望郷五首の歌類には、漢文のかかわりはないとしても、その五首が、一首一首のばらばらのものの寄せ集めではなく、五首一連としての構成のものとして受けとられるべきものであり、そこに、この望郷五首の歌の意義も見出されてゆくものと考えられるのである。

更にもう一つの特色は、旅人の歌が、旅人以前の歌人の歌、

もしくは旅人周辺の歌人の歌の中に用いられていた語句を、きわめて素直に、自己の情意表現の歌の中に受け入れて使っていることである。こうした作歌態度は、旅人に限らず、この当時の歌には特別にめづらしいことでもなく、むしろ当然の作歌手法として認められていたものであることは論ずるまでもないことであるが、しかし、この中でも旅人歌におけるそれは、まことに旅人らしい、大家の主長らしいおおらかな素直な性格を基礎として、率直にそのままに用いられている。換言すれば、当時の歌人達の中でも、もつとも歌人的なくさ味のない受けとり方、用い方をしており、他の作者が用いた意義内容をもそのままに受けて、その語句の本来的な、また一般的習慣的な用法を率直に受けて、それをしかも、うまくあて用いている点である。このことは、当時として、一つの代表的な知識的教養人、また読書人としての旅人と、その大家の主長としてのおおらかな性格とによつておのずからに現れ出て来た旅人作歌の風体とみなし得るものである。

しかも更に、旅人は、自己の歌の中でかつて用いた語句を、更に自分の他の歌の作歌の折に、また殆どそのままに用いている点は、同じ類語句の使用といつても、明かに旅人的特色となし得るものの一つといひ得ると思う。

上述の旅人歌における二つの特色をその抛り所として「帥大伴の卿の歌五首」の性格を分析し、その保有する意義内容を掘り出してみようとするのである。

○ 「帥大伴の卿の歌五首」中の第一首

わが盛りまた変若めやもほとほとに寧楽の京を見ずかなり  
なむ (3・三三一)

は、既に多く説かれているように、その直前に配列されている歌

大宰の少弐小野老の朝臣の歌一首

あをによし寧楽の京師は咲く花のにはふがごとく今盛りなり  
り (3・三二八)

及び、

防人司の佑大伴の四綱の歌二首の中の一首

藤浪の花は盛りになりにつけり平城の京を思はずや君 (3・

三三〇)

の二首を受けているものと認められるものであり、その用語において、「寧楽の京師」「平城の京」についてはいうまでもないことであるが、特に「今盛りなり」「盛りになりにつけり」を受けて、「わが盛り」と歌い出していることはその類語句使用が、前歌による触発的発想によるものであり、贈答歌的歌としての特色でもあるが、やはり、また、旅人歌の特色の一つとみなし得るものであろう。しかも、この歌は、旅人歌の評において常にいわれる自己中心的作風そのものの歌であり、最も旅人的な歌の一つである。

しかし、五首一連の歌の第一首としてみる時は、大きく

「寧楽の京師」への思慕の情を表出している点に、後の四首発想の基盤的歌とみなし得る所がある。

次に、第二首目

わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため  
(3・三三二)

も、また、第一首と同じく、自己中心の悲哀のみを表出したものとみられるが、この歌にはもう、前二歌人の歌に対する贈答歌的意識は全く見出され得なくなつており、一応単なる望郷歌とみられるものになつてゐる。

しかし、この歌中の「昔見し象の小河」にはなお問題発展の要素が存在する。今更、いうまでもないことであるが、この句は、旅人の吉野行幸従駕の長歌の反歌

昔見し象の小河を今見ればいよよさやけくなりにつけるかも  
(3・三二六)

の上句の繰返しであり、かかる素直な同句の再使用はやはり旅人的作歌の特色となし得よう。

所が、この「象の小河」は、旅人のこの二首以外には、集中に全く歌われていない素材であることは一応注意すべき点であろう。しかもこれを、簡単に旅人が深い印象を持つてゐる故に、かかる再度の使用をしたとするのみに放置しておいてよいか一つの疑点が残されるのである。

集中、この「象」の地象を歌の発想の契機とする歌は、他に黒人の「太上天皇の、吉野の宮に幸しし時、高市連黒人

の作れる歌」大倭には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼び  
ぞ越ゆなる

(1・七〇)

及び赤人の吉野の宮の讚歌の反歌

み吉野の象山の際の木末にはここだも騒く鳥の声かも

(6・九二四)

の二首が見出されるのみである。

この内、黒人の歌は

朝霧にしのに濡れて呼子鳥三船の山ゆ鳴き渡る見ゆ

(10・一八三二)

と並べて置く時、黒人歌の「象の中山」は「三船山ゆ」と入れ換えても、何ほども、その歌の詠嘆に重大な相違をもたらさないものである。それは吉野川対岸からの眺望の山を契機とする歌の場合は、その二つのいづれの山であろうと、実地的景観としては、さしたる相違が生じないからである。

しかるに、赤人における「象山の際」は、他の語句と全く入れ換えてない定着位をその歌中で占めている。この「象山の際」については既に多く論じられ来ている所であるが、特に高木市之助博士の「象山際考」(「吉野の鮎」所収)は、最も深く、その発想心底まで、用語考証と、実地観とによつて述べられているので、今更、筆者の再説を要せぬことであるが、特に、高木市之助博士が、臨地視察観を通して

「折から行幸に扈從して離宮に滞在してゐた赤人がこの清

流(象の小河―筆者注)に沿つてかうした『ヤマノハ』へ入つたといふことは誠に自然のことであらう」

「その『ヤマノハ』は(筆者補記)象の小川の入口に近い小さな山あひの地を指すものと観たい」

とされている。高木市之助博士は、恐らく、宮滝の対岸、所謂象山の麓をまわつて、山中象谷(喜佐谷)に入り、象の小河の景観に接せられたのであろうか。筆者は、昨夏、今日の吉野山中の如意輪堂の所から、山嶺ずたいに、象谷道、御園道の分れる地点を経て、所謂喜佐谷間の傾斜地を、静かに流れ下る象の小河の源流点近くから、川の流れが、時に近く、時に遠く離れる川音を聞きながら、今、人家のある同じく喜佐谷の広開部に下り、更に象の小河に沿いつ、離れつして宮滝の対岸に出た。この旅路の実感は、或は、高木市之助博士のコースとは逆であつたかも知れないが、全くの同感を得たことであつた。更に高木市之助博士が

「この場合赤人の立つ環境はこの一語によつて実的確に写生されてはゐないか。そこは決して深奥幽遠な峡谷といふほどでは無いが、唯の山中、山辺、山麓などと呼ばれてゐる場所よりは、もつと静もりがあり、陰翳を伴なつてゐる「際」といつただけで既にかすかに下に一筋の流れが示唆されたかも知れない。さういふところで木梢を仰いで聴き入る鳥の声はなるほど赤彦の所謂『天地寂寥相』に合してゐたであらう。」

と記されている。特に長く高木市之助博士の文章を引用さしていただいたことは、筆者の同感を筆者の拙文をもつてすることを避けたずるさはお許しいただかねばならないことであるが、特に、筆者が附点した部分は、旅人歌における「昔見し象の小河」の理解に重要な連りを持つている観方であることを併せて述べたかつたからでもある。

象の小河は、吉野川岸、宮滝の地の対岸で、菜摘から数メートル下流の川岸壁の岩間からわずかに流れ落ちてゐる姿が見えるにすぎないほどで、それと指ざされなければ、見すごしてしまふくらいである。勿論、季節により水量の相違はあるとしても、直ちに視界に入るほどの流の姿はなく、奈良時代においても大した差は恐らくあるまいと思われる地質、地形である。こうした象の小河の吉野川への流入口のある所は、むしろ、「夢の曲淵」の終末部分で、河中の巨巖に、吉野の溪流が、白木綿花にしぶきをあげて激流する所であり、その部分の詩的印象はすべてその方に奪われてしまふ所であつて、象の小河の流入部は特別に何らの印象をも与えない姿をなしている。旅人の「象の小河」は、赤人の如く、象山の麓をまわつて喜佐谷中に入つてはじめて、詩的感動の対象となり得る姿を見せて来る。

しかし、また、旅人時代までのみに必ずしも限ることではないが、この頃の歌が、単に景観に対する詩的感動のみを歌の素材として歌を作つていないという傾向、即ち、対人的情

意を基底として発想作歌し、景観に対する感動そのものは、その対人的情意表現の手法素材であることよりすれば、「昔見し」の句に対人的情意が含有されているとみることは無理ではないであらう。しかし、この句は既述の如く、吉野行幸従駕の歌の反歌の中に用いられており、それ以前、また、その周辺に「昔見し」の内容を解明する要素を今日の資料においては見出し得ない故に、今、この歌についての結論的解釈には到底到達し得ない。

しかし、「昔見し」に見出される対人的感情は、同句含有の二首において、その対象人は、恐らく相違している者としても、ともかくもそこに、対象人が意識される点は注意しておかなければならないことであり、この問題は、この五首を一連の作と見る立場に立つことによつて、特に、次の二首の解明を待つて一つの解明へ導き得ると考えるのである。

## ○

論述を簡明にするために、第三首を後説にまわし、筆者が、この五首一連にこめられているとみる情意を比較的明確に示し得る歌であり、同時にこの五首一連の最も中心をなす歌と考える第四首目の歌に依ることとする。

萱草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れぬがため

## (3・三三四)

この歌は、旅人が、青年時の思出に連る香具山の里を忘れ得ないで、心苦しむ故に、忘れ草を身に付けて忘れようとする

のだとする意に解する望郷歌として受けとられている。

しかし、この歌は、旅人的類語句使用の性格を通して見る時、必ずしもその意のみに終るものとはいいい切れない点が見出されて来る。

まず、上句、「萱草わが紐に付く」の表現に対する集中類例は容易に見出される所であり、

萱草わが紐に着く時となく念ひわたれば生けりともなし  
(12・三〇六〇)

萱草垣もしみみに植えたれど、醜の醜草なほ恋ひにけり  
(12・三〇六一)

萱草わが下紐に著けたれど 醜の醜草言にしありけり (4  
・七二七)

前二首は、卷十二所収歌であるが、なおその人麻呂集外のものである故に、旅人歌との前後関係の確定的結論は出し得ない点があるとしても、卷十二の性格としては、少くとも、旅人以後の歌でないことは承認され得よう。第三番目の歌は、明かに家持が坂上家大嬢に贈つた歌と記されており、その用語句は、前二首を先蹤とするものであり、旅人以後の作であることはいうまでもないことである。

しかし、今、これらの作歌時の前後の問題はともかくとしても、今ここに第一に注意すべきことは、この三首中において、「萱草」そのものが恋情表現の素材語句として用いられ

ている点である。なお、

わが屋戸の軒の子太草生ふれども恋忘草見れどいまだ生ひ  
ず (11・二四七五)

この歌の「恋忘草」は集中唯一例であるが、ともかくも、卷十一の人麻呂集中の歌であり、旅人歌以前の歌であることは明かなものであり。その「恋忘草」は「萱草」の歌中用語としての本意を明示しているものである。

以上の四例の本意からしても、旅人歌に「萱草わが紐に付く」の語句は、当然、変情表現語としての意識で用いられているとみるのが正しく、旅人的受けとり方であると考えられる。ここに至つて、その恋情が、亡妻大伴の郎女に対する追憶の恋情であることはこれ以上に述べるの要はないことである。

この上句の解明を更に確かにするものとして、第四句の「故りにし里」の句意の解明が意義を担つてくる。しかも、同句は、直前の第三番目の歌

浅茅原つばらつばらにも念へば故りにし里し念ほゆるか  
も (8・三三三三)

にも用いられている。

この二首中の用例を除いて、なお集中には「古りにし里」の句を含む用例八首がある。それらの八首中の用例はすべて「古りにし里」は「妹の里」、即ち、婚姻的關係にある男女が、

別居を常態とした古代婚姻習俗の世界における、男の訪れる里即ち妹の里をのみ表わす句として用いられ、単なる「ふる里」とは別個の意義を持つ語として用いられている。(今、この立証論を記す余地を得ないので、筆者の結論を提示するのみで論をすすめなければならぬことは残念であるが、これについては拙論「『葦垣』考」「和歌文学研究」第三号所載及び「続『葦垣』考」を参照下さい。)

故に、旅人歌における「古りにし里」も、旅人の類語句使用の性格からして、当然、妹の里の意義を保有して用いているものとみるべきである。もう詳説の要なく、その妹の里は、大伴の郎女の里を指して表わしているものであり、その「香山の古りにし里」は、勿論、旅人青年時の里であると共に、旅人の妻問いの里であるのである。

かくして、この第四首目の歌意は、亡妻大伴の郎女の里——亡妻への追憶に心深く悲しみ胸ふたがる慕情の切々とした苦しさを、ほんの一瞬をも離れ得ない——忘れられない苦しきのために、恋忘れするという萱草を身につけることだと歌っているのである。しかし、その旅人の真情はその歌の表意とは、全く逆に専一に亡妻大伴の郎女への慕情、追憶にたつたものであることは、歌を作り、また歌を研究する者にとつては、むしろ初歩的享受の容易さで理解されることである。

当然第三首目の歌における「古りにし里」その妹の里であり、旅人歌以前に見られない用語「つばらつばらに」(もう一例あるが、推定憶良の男の歌であり、旅人以後であるので問題圏外のものである。)は下句と対応して、旅人の亡妻に対するこまやかな切々とした慕情を表わし得て、まことに適切な感情表現語であり、この語の存在がまた、この歌における「古りにし里」の妹の里としての意義の把握をより完全とさせているものとみられるのである。

この二首は、「帥大伴の卿の歌五首」中、最も中心的位置に置かれ、旅人のこの五首における真情を歌いあげたものとみられるものであり、望郷歌としての表現の内にこめられた真情は、旅人の亡妻大伴の郎女に対する思慕と追憶とを主体的に内包するものである。

最後の第五首目の歌は、漢詩における結句的位置と意義とを保有する歌である。その歌中の「夢の曲淵」は「象の小河」に連る発想表現契機語としての用法であり、これを含む下三句の表現は、旅人歌以前にも、また旅人歌中にも、その類想発想が認められる比喩句にすぎず、真情は第一、第二句にあるのであり、この上二句の抽象的表現は、前四首に表現されて来た真情の、更に未来的発展の願望を表出しているものである。それは、妹の里(それは同時に、旅人の里をも含むものであるが)妹の魂の帰り着いている里への旅人みずか



らの帰着を願望することを通して、かつての妹の里への訪れの回想を二重写しとして、妹の魂との再会を、妹—亡妻大伴の郎女に呼びかけている心情の表出と受けとり得るのである。

以上の考察を通して、更に、第二首目の「昔見し象の小河」も妹とのかつての印象に連りを持つ地象であると認め得る一点が見出し得ると思う。

○ 以上によつて、旅人のこの望郷歌五首を、単なる望郷の歌としてのみ受けとることは、旅人のおかれた環境と、そこにおいて形成された旅人の後天性に基底を置く、旅人的歌体の表皮的把握にすぎず、旅人歌の表皮下、その内実にごめられた、旅人の主情に到達し得ていない享受であるといひ得ると思ふのである。

かくして、「帥大伴の卿の歌五首」に内実としてごめられている主情は、そのまま

「神亀五年戊辰大宰の帥大伴の卿の故人を思い恋ふる三首」

「天平二庚庚午の冬十二月 大宰の帥大伴の卿の 京に向

ひて上道せし時作れる歌五首」

「故郷の家に還り入りてすなはち作れる歌三首」

の情意に真直ぐに連るものであるといひ得るであらう。

## 万葉研究旅行予告

本年の万葉研究旅行は、左記の通りの計画で、着々準備を進めている。昨年の瀬戸内海方面研究旅行には七十五名の参加者があり、本年の計画も好評で、発表前すでに十名にあまる予約者があり、成功が期待せられてゐる。

### (一) 目的地

越中・能登方面(主として大伴家持の越中守在任時代の多彩な作歌地盤となつた地)

### (二) 期日

八月九日(金) 午前八時高岡駅前、大伴家持銅像前集合

前夜の二十一時十五分上野発急行「北陸」で立つと翌朝七時二十分に高岡に着く。そのほか東海道線米原經由で行く方法もある。九日(金)高岡または伏木泊り。十日(土)和倉温泉泊り。十一日(日)夕、金沢駅解散。(多少の変更があるかもしれない。)

### (三) 経費

三、八〇〇円(宿泊料・遊覧バス・見学費その他。ただし往復乗車賃は各自負担)

なお、詳細は各方面との交渉成立ししだいに発表するが、参加希望者は左記に申込まれたい。

○ 文京区小石川一丁目

中央大学文学部国文学研究室

○ 千代田区神田三崎町

日本大学文学部国文学研究室

○ 神奈川県逗子市逗子一四六 森 脇 一 夫